

り、花の句よせたる中に、政直が句ひなといへど、花の都の細工かな、これ鄙に雛をよせたり、其頃は、いまだ遍くもてあつかふことにはあらずとみゆ、明暦二年刻したる世話焼草、三月の條、三日節句云々、ひな遊、巳日祓とつゝけて出たり、寛文元年一雪が獨吟百韻、もとむるにさても直段のやす屏風、ひなあそびはたゞ祝言のみ、是又雜

〔東都歳事記三月〕三日 女子雛遊二月の末より、屋中に段をかまへて飾るなり、當才の女子ある家には、初の節句とて分て祝ふ、

〔江家次第第十七〕立太子事

或幼宮時略○中奉帳中阿末加津云々、但有常阿末加津土器撤、其後供比々奈

〔空穂物語嵯峨院〕おほと、きたのかた、御物がたりし給ところ、きんだちあそびありき給、女ごみ御ぐしかいしきばかり、いとおかしげにて、ひるなあそびし給

〔空穂物語樓の上〕宮は雪をぞ山につくらせ給て、まろと二宮とは、ならべてみ侍しかしとの給ま、に略○中ひ、なあそびなど、もろともにしてみせたてまつり給

〔空穂物語樓の上下〕あけぬればくる、までいぬみやひな○ひな一本あそびしたまふ

〔中務集〕七夕の繪の中宮のひ、なあはせ○あはせ一本あそびしたまふに、かはらのかた、すはまにつくれり、ひ、な略の車のかた七月七日○歌

〔齋宮女御集〕うちにおはせし時、ひ、なあそびに、神の御もとにまうづる女に、おとこまであひて、物いひかはす○歌

おなじひな社の前の河に、紅葉ちる所に略○歌

〔枕草子〕二すぎにしかたこひしきもの、ひいなあそびのてうど

〔源氏物語五紫〕ひるな遊びにも、ゑかい給ふにも、源氏の君をつくり出て、きよらなるきぬさせか、しづき給ふ○中ひるななど、わざとやどもつくりつゝけて、もろ共にあそびつゝ、こよなきもの